



ピノコパパのエッ
セイ集から



静の桜

pinokopapa

シズカの桜 -1-

今春真っ盛りの桜の季節に、ちょっと悲しい物語を語ってみたいと思います。シズカの桜と聞けば、もうお分かりの人もおいでかと思いますが、静御前の悲恋ものがたりです。

香川県には静御前にまつわる伝説が多々あります。木田郡三木町の長尾寺には、母の磯野禅師と静の親子が得度し、仏門に入ったという伝承があります。更にその剃髪した髪と剃刀を供養した剃髪塚があり、磯禅師の墓と静御前の位牌が祭られております。ところが何にし負う、天下に鳴り響いた悲恋の美女でありますから、静御前のお墓と言うものは日本中あちこちにあって、淡路島、埼玉県久喜市の高柳寺、福島県郡山市の静御前堂と、数え上げれば切りないほどです。

ところで、静御前は義経の何だったのでしょうか。義経の正妻は河越重頼女と言われる人でありました。これは都で華々しくもてはやされる義経の身を落ち着かせるために頼朝が鎌倉より決めた縁組でした。そして同時期に義経は静御前と出会っております。この静御前についての歴史書での記述は、吾妻鏡のみだと言われております。この吾妻鏡の編纂者は北条氏で、この人たちに都合のいいように書かれたものであることは間違いないことと思われませんが、では静御前の事を歴史の表に残して何がよかったのでしょうか。容易に想像が付きませんが、吾妻鏡にある北条政子が静に情けをかけたことの記述は、その時代を生きる、片や権力の頂点にたつものの妻、もう一方はそれに討たれるものの思われ人という境遇の違いこそあれ、ひょっとしたら立場が入れ替わっていたかもしれない女同士の、それだからこそ通じ合うあわれが見えてきます。

その静御前ですが、母磯禅師という人も白拍子で舞の達人であったそうです。というより、あの徒然草にさえ、鳥羽上皇のみぎり、藤原信西が曲を選び、磯禅師に白の水干、鞘巻の出で立ちをさせ、烏帽子を付けた男装で舞を舞わせたのが白拍子の始まりと書いてあるとか。しかしこの記述も、徒然草がそれよりも余程後世の物でありますから、信ぴょう性には疑問があります。

しかし、この記述に見える藤原信西ではないが、それでも藤原一統の身分ある人が、静御前の父であるという逸話もあります。

その白拍子がこの時代の遊女であったことに違いはありません。また、白拍子とは、その舞そのものを指してもいるのですが、そ舞の出で立ちを見ると連想させるものがあります。その通り、白の水干、直垂、緋の袴、そして烏帽子などから、巫女舞が原点とも言われます。巫女舞は巫女が舞を舞い、それに神が憑依する神事でありました。ですから、義経と静の出会いは神

泉苑における雨乞いの舞の儀式の折であったと言われております。

さてそろそろ義経と静御前の出会いをかたることにしましょう。

シズカの桜 - 2 -

さて、義経と言う人の事をまず語っておかなければなりません。いまさらの事ですが、頼朝は義朝の長男であり、源氏の統領たる人でありました。それに比べ、義経は九郎と呼ばれる通り、9番目の異母弟で、同じ母の兄弟は今若、乙若という兄がおりました。そして義朝の男の子供としては末であって、頼朝が挙兵した時、対面に向かうのですが、頼朝から見れば知りもしない

兄弟ではあったのです。ですが、なぜか実際の平家討伐には義経を代官として向かわせます。もちろん負けられぬ戦で、義経が負ければ自分も危ういことになるという場面ですが、なぜ義経を用いたのでしょうか。彼に軍事的才能を見出したのでしょうか。疑問として残しておきます。しかし、多分ですが、義経はそれなりの手勢を率いていたのではないかと思われるのです。それも相当な数ではなかったのでしょうか。自分の手勢を持たない頼朝と、そこに違いがあったのだと思います。そして、人を引き付ける才もあったのでしょうか。たとえば、壇ノ浦の闘いでは、悪天候のさなか、義経は身の回りのほんの僅かな手勢をつれて先ず徳島に渡り、地元の郷氏たちを糾合し、手勢を集めて、それによって平氏を打ち負かします。このとき、鎌倉からの軍は後方にあつて間に合つてお

りませんし、その数もまた平氏ほどでもありませんでした。

さて、その年は一年の内百日続く旱で、賀茂川桂川さえ瀬切れで流れずと言うありさまで、高僧たちによる雨乞いの行を行ったのですが靈驗なく、そこで神泉苑の池の前で白拍子百人に舞わせれば龍神もこれを納受して飴を降らせるのではないかということになり、後白河法皇の御幸をあおぎ、百人の白拍子を集めて舞を舞わせました。しかし九十九人まで舞っても雨は降らず、あと一人となって舞ったのが静御前でありました。もはや効あるまいとはなったのですが、物の数であるから最後まで舞わせと法王の御言葉もあり、静はしんむしょうと言う曲の白拍子を舞いました。するとにわかに黒雲が巻き起こり、八大竜王鳴り渡りて、あとは三日三晩の洪水となって、静の舞には知見ありと法王から日本一の宣旨を賜りました。そしてこの席に同席した義経がこの静を見初め、妾としたのでした。さらに鎌倉殿もこれを聞き、これは一番見たしと思召したと義経記にあります。ここに早や鶴岡八幡での静御前の舞の伏線があるわけですが、義経記は虚実入り混じっているとされていますから、どうなのでしょう。このとき平家討伐を成し遂げた義経は左衛門少尉、検非違使に任じられており、後の対立の火種にもなっています。それゆえか、鎌倉より義経の正妻として河越重頼女、郷御前がやってまいります。この人はさすが正妻だけあって、後々まで義経に従ってゆきます。

シズカの桜 - 3 -

ちょっとこの文章から間遠くなり、当地の桜はとうに散って葉桜も葉の色が濃くなってしまいました。そうすると、もう見る人もいなくなり、どうして見てやらないのと天邪鬼につい思って、散歩のときよく観察もし、まじまじと見もして、昨日と変わっているところを見つけようと努めています。暇ですから。

静と出会って恋に落ちた義経は、鎌倉殿が官位を受けたことに激怒しているとはつゆ知らず、鎌倉から来た河越重頼の女、郷御前とも正式に婚姻します。このあたりを今の感覚で判断してはいけません。当時はこれが当然だったのです。のちに追われて京を脱出する際、義経は静も交えて十数人の女性を伴っていたとされています。彼自身も

義朝の何人目かの妾の子であったわけですから、ここに倫理観を持って批判しては的外れになります。

この後、義経は屋島、壇ノ浦と平家を滅亡に追いやります。そして、この後有名な腰越状の話につながってゆきます。結局、義経は鎌倉に入ることも許されず、すごすごと京に帰るのですが、つまりは軍事の天才であって、かつ幼稚さを残した英雄の辿る道を行ったということかもしれません。動乱期にのみ英雄は生きていられるものです。織田信長、秀吉、西郷隆盛と同じ道をたどっています。

つい、実像を先にかたってしまいましたが、義経は京に帰り、ともすれば京の院の思惑に乗って、反鎌倉の様子さえ見せます。彼は英雄で、かつ戦の天才ですから鎌倉幕府なぞ叩き潰してくれると思ったのでしょう。院は義経を院御厩司に任じ、頼朝討伐の宣旨を発します。ところが頼朝は土佐坊に義経を討伐させます。これが堀川夜討と言われるものです。ここから義経の凋落が始まります。

シズカの桜 - 4 -

もう目の前の敵が居なくなり、鎌倉打倒を叫ぶとも早や京周辺の武士さえ義経には付こうとしません。頼朝追討の院宣こそ受けてはいても、逆に義経に刃向うものさえ現れます。そして、今度は院ではなく、法皇が義経追討の院宣を出します。このあたり、もはや実際の力を失くした公家たちの薄っぺらな権謀術数が、力にねじ伏せられていることを見せつけられる思いです。この時から朝廷は現実的な力を失います。

こうして頼朝は自身が義経追討に軍を率いて、京に向かいます。義経はこれに対して、九州で再起を図ろうと300騎の武者を率いて京を落ち、途中襲撃を受けたりしますがこれを撃退し、尼崎から船団を組んで脱出を図ります。しかし弱り目には祟り目がきて、嵐に襲われ、船団は大破し、主従ちりぢりになって、もはや体勢を立て直すことは出来なくなります。そこで京周辺に身を隠しますが、同様に隠れ潜んでいた一族郎党も次々と捕えられ、殺害されます。それでもなお義経は反頼朝の寺院などを転々として

、吉野にたどり着きます。ところが吉野の山は女人禁制。義経はここで静御前を置いてゆきます。

静は京に戻るほかになく、帰ろうとしますが、途中で従者に裏切られ、持ち物一切を奪われて山中を彷徨い、あげくの果てに山僧に捕まり、母の磯禅師とともに鎌倉へ送られます。

と言ったことが吾妻鏡などには書いてあるようなんですが、このことの真贋はまあいいでしょう。それにしても、長々と掛かって、やっとここまで来ました。この吉野の別れの時、義経27歳、静19歳でありました。この後義経自害は29歳でありました。そしてその2年の内で、静は女であるゆえに、女の定め通り鎌倉に囚われて悲しい運命に振り回されます。

義経に置いてゆかれた静は、頼朝から義経の妾としての扱いも受けません。今でいうなら只の愛人程度でしょうか。また、義経の行方も左程追及されもしません。聞かずともわかっていたからでしょう。しかし、鶴岡八幡で舞えと命じられます。都一の白拍子として、興を添えるために舞えと言うのです。これを花見の席の座興とする文章もありますが、この時代、桜の花見の習慣はありませんでしたから、ちょっと違うと思います。その静の舞を更に望んだのが政子でありました。日本一の舞の芸を見ないのは残念なことと、頼朝に頼みました。静は、夫である義経を打とうとする鎌倉幕府の弥栄を祈る場で、舞わされます。故にか、静は義経の妾と名乗らず、

これは都にある白拍子でござる

と名乗ります。これも意地であったかとおもいます。しかし、その始めの舞はどこか虚ろで見る影もなく、これが日本一かと囁かれます。しかし、後半、意を決して、

しづやしづ しづのをだまき くりかえし むかしをいまに なすよしもがな

と謡い、

よしのやま みねのしらゆき ふみわけて

いりにしひとの あとぞこいしき

と舞います。

誠にこれ社壇の壮観、梁塵（りょうじん）

ほとんど動くべし、上下みな興感

を催す

と、吾妻鏡に表されています。だが頼朝は、この頼朝の前で、なお義経を慕い舞うとは、と激怒します。それを取り成したのが政子でありました。私が静御前と同じ立場にあったとしても、わたしもあのように謡うでしょう。この言葉によって静は助けられたのです。

しかし、この時静は義経の子を身籠っておりました。

その子について、女の子なら助けてやろう、男の子なら殺してしまえ、と頼朝は命じておりました。清盛は義朝の子を、頼朝以下男子の子であっても助けておりました。それによって清盛は滅ぼされたのです。滅ぼした頼朝がそのことを一番よく知っていて、たとえそれが妾の子であっても男子であれば、その子が後に自分を滅ぼしに来るとわかっていたのです。

男系男子が家を継ぐ。それがこの時代からの決まりでした。男系男子、男子一系を高らかに唱え、それを美しい伝統と言うなら、正妻に男子がなければ側に出来た子であっても構わない、男子を立てることに異議はないのでしょうか。そうと聞くと、これほど女性をないがしろにした話はないと思うのですが、どうなのでしょう、櫻井よしこさん。あなたの家に男子が生まれなければ、夫が妾を囲って、腹は借り腹、子を産む道具というのでしょうか。まるで自分も妾も軽んじる、女性差別を推奨する言説と思えます。ましてや皇室に生まれた女性宮様まで否定するとは。

話が横道に逸れました。はたして、生まれたのは男の子でありました。静はその子を布に包んで隠し、奪いに來た武士に渡そうとはしません。ならば親子ともども、磯禪師まで一緒に殺してしまえと頼朝は命じます。罪人は子をなすことも許されぬのだということです。はたして頼朝自身も、流されていた伊豆で自分を監視していた豪族の娘と恋に落ち、子をなしたのでしたが、その子が男子でした。それゆえ、生まれたばかりのその子を、娘の父親の部下の手によって、川に沈めて殺されました。それも頼朝の目の前でです。

この過酷な命に従い、禪師は生れた子を頼朝の部下の安達清常に渡します。子は鎌倉の由比ヶ浜に沈めて殺されました。静は生まれた子供を殺させまいと隠し、禪師は自分の子の静を殺させまいと孫を差し出す。それを殺させた頼朝も、かつて自分の子を殺されています。だからと言って、義経の子を生かしておいては後に自分が滅ぼされることになる。こんな、おなじ血の中で殺し合う葛藤は何のためだったのでしょうか。

この後静と磯禪師は、彼女たちを憐れんだ政子とその子の大姫から沢山の重宝を与えられて京に帰されます。しかし、この京に帰ったというのも一応の事で、詳しくは解りません。静も禪師もどう生きたのでしょうか。この後の事は色々な伝説となって伝わる

のみで、公式な文章では残っておりません。その伝説の一つが宇都宮市野沢町の御前桜、静のさくらです。静と禅師、そしてそのお供の亀井六郎は、京を脱出して奥州の義経のもとへ向かいます。ところがその途中で、衣川の闘いに敗れて義経が討死したと聞き、悲嘆にくれた静が義経より送られた桜の杖を地面に差すと、それが芽をふき、後世まで咲き残ったと伝わっています。

この伝説の真贋は別として、京を脱して彷徨い、霊を失ってただ生きてあり、まるで生きてない人たちが、滅ぼされると解っている義経のもとへ行こうとしている様は、タナトスに支配されているとしか思えません。しかし義経に先に行かれ、後はまた彷徨うしかなく、その静が残したのが、シズカの桜であったとしたら、美しいと愛でてやりましょう。シズカの桜は12代目だそうです。

平家物語に登場する女性たち

平家物語は、軍記物と思われているのが当然のことです。しかし、その冒頭すら、

祇園精舎の鐘の声

諸行無常の響きあり

沙羅双樹の花の色

盛者必衰の理をあらわす

おごれる人も久しからず

ただ春の夜の夢のごとし

たけき者もついには滅びぬ

偏に風の前の塵に同じ

と、日本人独特の無常感が流れています。そうみれば、平家物語の闘いの場面さえ、美意識に貫かれた、はかない絵巻物に見えます。

この軍記物語の最高傑作は、源氏と平家の闘いのことばかりに目が行きますが、実は様々な女性も登場しています。一番知られているのは静御前でありましょう。(この女性に付いては静の桜ですでに述べました。) 木曾義仲の愛妾、巴御前、頼朝の正妻、政子、建礼門院徳子、祇王祇女と仏御前、小督、小宰相、さらには、祇園女御と、様々な運命の下で生きた女性が描かれています。そんななか、あまり知られていない女性たちとして、祇王祇女と仏御前がいます。物語の中でも、ほんの少し語られているだけで、見過ごそうと思えば読み飛ばせるほどにしか書かれてはいません。また、平家物語の基調低音に沿わせようとして語られているので、不自然にさえ見えます。しかし、権力者に翻弄される平家物語の女性の姿そのままではあります。

平家物語の中の祇王と仏御前の小さな物語は一面、最高権力者に登りつめると男はどこまで人の心がわからなくなるかという話とも読めます。そして、あの時代の女性はどのような扱いを受けていたのかということもわかります。常盤御前も同様、巴御前でさえ同じ運命でありました。

巴御前については、さまざまな誤解があるようです。彼女は義仲の妻ではありませんでした。いわゆる妾であったのです。しかし、単なる妾ではなく、大力、強弓の女武者でありました。そして義仲が追い立てられ、従うものも数少なくなった時も、未だ義仲に付き従い、ともに討ち死にせんと闘っていたのですが、義仲は落ち延びさせようと、最後に女を連れていたとなれば恥だと説得いたします。巴はいやいやながらそれにこたえ、最後のいくさしてみせ奉らんと、追手の将を倒し、落ちてゆきます。そこまで義仲と一心同体の思いであった巴御前でありましたが、その後に源頼朝から鎌倉に呼び出され、和田義盛に下げ渡されて妻となり、朝比奈義秀を生みます。そのあともまた、越中国礪波郡福光の石黒氏の元に身を寄せ、のちに出家して主・親・子の菩提を弔う日々を送って九十一歳で生涯を終えたという後日談が残されています。こうなると、わが子の命乞いのため、清盛の妾となったと言われている常盤御前の話も信憑性があるように思いますが、それはそれとして、この時期の女性は権力者とか男の都合で、どのようにでも扱われたことはその通りだったとおもいます。そこに女性の意志はありません。考慮されとかではなく、無視され、無視したと意識もされていません。なんとも不思議なほどです。又、女性もそれに従います。それがこの時代の男女両方の常識であったのでしょう。そしてまた、女性の処女性にもこだわりません。宿敵の妻であろうと、美々しければ妾とし、部下にも下げ渡します。祇園女御など、後白河法皇の子を孕みながら平忠盛に下げ渡されます。その時の子が清盛とも言われています。

ちょっと余談ではありますが、当時の武士は不浄のものでありました。平家一門の館があった六波羅は、洛中から京都の住民の葬地の鳥辺野に入る際の入口でありました。ですから、いわば賤民ほどでありました。それが殿上人にまで登りつめるのですから、平家はどれほどの努力と忍耐がいったことかと思います。そして、たとえ後白河法皇の子であっても、朝廷を追い出されてひそかに生まれる子は貴種ではなく、卑しい身分ほどのものであって、そのほうが都合がよかったのでした。

また、女性の処女性を当時は気にしなかったということですが、これはエンゲルスの家族・私有財産・国家の起源が一番よく説明します。

私有財産制度の成立とともに、母権制氏族社会が転覆され、「女性の世界史的敗北」（エンゲルス）がおきた。私有財産は家父長制から一夫一婦制へ移行し、それらは姦通と娼婦制度によって補完される

すなわち、男は自分の財産を、実の息子に譲りたいとだけ願望すると言った程度のことです。通い婚など、母権制氏族社会の名残りがまだあったときで、私有財産は確率しておりませんでした。武士が出てきて初めて荘園などの領地をもつようになり、そこから私有財産という概念が出来るのです。なんともはや。

荒地であったところを切り開いて耕作地に作り替え、それを自分の領土とする、それが武士の起こりであり、私有財産の始まりでありました。その領地を安堵してもらい、朝廷からも他の領主からも奪われないようにするために、主従関係が出来、家の子郎党となってゆきます。そのとき主は棟梁と言われました。そして、自分の土地を必死に守るということから、一所懸命という言葉が生まれたのでした。これをいまは、一生懸命と言いますが、ちょっと間違っ、それがほんとうになってしまった典型的な例ではあ

ります。

話が逸れました。祇王と仏御前の小さな物語は、仏御前が祇王の囲われてる西八条の清盛邸に押しかけるところから始まります。この時、仏御前は十六歳。本名は千歳と言い、十四歳の折から京に移り住む叔父、白河兵内のもとで舞、歌を修行し、十六歳になった時には京でも貴人、上下に関わりなく呼ばれ、白拍子の名手と評判をとっておりました。それにもかかわらず、一人、入道相国にだけは呼んでもらえておりませんでした。それが悔しいと、仏御前は自ら清盛邸に押しかけます。なにしろ一天四海を手に行っているのは入道相国でありますから、その人から無視されているのは白拍子の名折れと、仏御前は思い込んでいたのです。しかしながら、呼んでもいないものを、そちらから押しかけてくるとは、なんという不心得者か。ましてやここに祇王というものがあることを知らぬのか。とっとと去れ、と言うように家人に申しつけます。それを聞いた祇王が、若い白拍子のことですから、芸を見ずとも、せめてお目通りを、と取り成します。このことが、祇王の不幸、仏御前の不幸の始まりでした。清盛も祇王の取り成しを聞き入れ、わごぜの申すことゆえ見参だけと、許します。そして、清盛は仏御前にあって心変わりします。せっかく目通りさせたのだから、今様なりと、うたってみよと言いつけます。その時、仏御前が即興で歌ったのが、下記の今様でした。

君を初めて見る折は

千代も経ぬべし姫小松

御前の池なる亀岡に

鶴こそ群れ居て

遊ぶめれ

それを面白しと聞いた清盛は、舞も舞って見せよと言い出します。見事に舞って見せた仏御前に清盛は心を移し、このまま西八条邸にとどまれと命じます。

仏御前の名の由来は、幼少より深く仏教に帰依して信仰してきたからでした。といっても、この時仏御前は十七歳、いかに白拍子の才に恵まれ、名も挙げたからと言って子供子供したところを未だ残していたのではないかと思います。それゆえ、祇王への競争心で西八条殿にまで押しかけて参ったのでしょう。しかし、清盛にこのまま残れと言われて戸惑いはしても、喜ぶようなことはなかったのではないかと思います。白拍子は遊女とも言われておりますが、一面巫女の役割も果たし、一概にそう言い切れないのです。静は義経と、雨乞いの行の場で出会っております。

祇王と仏御前の物語は、祇王のはなしではありません。目次は祇王と仏御前となっておりますが、仏御前のお話です。清盛は、仏御前を殿にに入れるために祇王をおいだすのですが、その時祇王はふすまに歌を書き残します。また、追い出した祇王を、仏御前の無聊を慰めようと、殿にきて舞を舞え、今様を歌えと強要します。まさに一天四海を握った相国様ゆえ出来る所業であります。祇王はそれに耐え、舞を舞い、歌いもします。そして嵯峨野の奥に帰り、自害せんと妹と語りますが、母もともに死のうといい、そうすれば五逆の罪に落ちるぞと言い出します。すなわち、仏御前を殿にに入れるために祇王を清盛はおいだすのですが、その時祇王はふすまに歌を書き残します。また、追い出した祇王を、仏御前の無聊を慰めようと、殿にきて舞を舞え、今様を歌えと強要します。まさに一天四海を握った相国様ゆえ出来る所業であります。祇王はそれに耐え、舞を舞い、歌いもします。そして母の待つ家に帰り、自害せんと妹と語りますが、母もともに死のうといい、そうすれば五逆の罪に落ちるぞと言い出します。すなわち、殺父、殺母、殺阿羅漢、出仏身血、破和合僧の五重の罪のことで、この罪を犯せば無間地獄に落ちると言われております。母を自害させれば殺母となり、お前たちが来世で無間地獄に落ちる、そのことが母はつらいといって自害を止めます。そのあと、祇王たちは今生をあきらめ、往生を願って嵯峨野の奥に引きこもり、小さな庵で念仏三昧にくらしします。それがいまも残る、往生院祇王寺です。

あるよる、その庵の竹戸を叩くものがありました。恐る恐る戸を開けてみると、仏御前が立っております。仏御前は、祇王様に起こったことがわが身に起こらないとはい

えません。明日は我が身と思うたればこそ、逃げて参りましたと告げます。そしてどうぞかくまってくださいと頼みます。祇王たちも仏御前の言うことに共感し、のちはともに仏を願い、それぞれ時の差はあれども往生をとげた物語は語って、後白河法皇の過去帳に四人の名がともに書かれたことは有難いことであると結びます。そして、祇王寺には祇王、祇女、刀自の墓と清盛の慰霊塔があるそうです。こうであれば、これはまるで日本霊威記そのままです。平家物語もそれと同じような仏教思想が底流ですが、そのわくを超えた美が平家物語にはあります。ぜひ全編読まれることをお勧めします。

と結語してしまえば終わりですが、仏御前のことはまだ語らなければなりません。仏御前が逃げてきたとき、彼女は身ごもっておりました。尼寺で尼僧が出産するなど、あってはならないことでありました。それゆえ、仏御前は父親の元へ帰ろうとします。そして。その途中で産気づき、岩にしがみついて出産しますが、死産でありました。十八歳か十九歳であったろうとおもいます。結局彼女は父親のもとに帰り、二十二歳で亡くなります。これを知ると、祇王たちの仏御前への共感同情はどうだったのかとおもいます。仏御前は祇王寺におられなかったのです。そして仏御前の慰霊塔ではなく、清盛の慰霊塔とは！

仏御前がしがみついてお産した岩は、いまは安産石となってお参りされているそうです。死産であったのに皮肉なことです。

平家物語のエピソードと枝葉の話

平家は壇ノ浦に追い詰められ、必死に戦いますが、ついには滅んでゆきます。そこには軍事の天才、義経の存在がありました。では彼の壇ノ浦での天才はどこにあったのでしょうか。彼は常識もしくは約束事をやぶったのでした。たしかに御前の潮の流れを読み切り、いま自分には不利な潮目が、午後になれば向きを変え、なおかつ、午前には倍する早い流れで平家の船を押し流すと知っていて、午前の闘いを必死に耐え、支えたのでした。そして、午後になって潮が変わると一気に勝敗を決しました。これは戦術ですから、正々堂々の闘いといえます。では義経の約束事破りの、破格の作戦は何だったかということ、お互い、暗黙の了解として守っていたこと、つまり、船頭、船子は切らない、矢を射かけないという常識を破ってみせたことでした。それを知らずに平家物語の壇ノ浦の段を読むと、まったく気が付きません。いや、船頭船子といえども、敵方である

限り、戦闘員として攻撃の対象になって当然と思うのが現代人の常識ですから、気が付きようがありません。しかし、当時は違っておりました。船を操るのは平家とは別の水軍でありましたから、後々勝敗に関わらず、なにかと差しさわりが出てきます。なにせ、瀬戸内海は水軍の支配する海で、交易は時の政権にとって莫大な富をもたらします。また水軍を味方につけると、それだけで大変な軍事力になるのです。それゆえだからでしょう、大山祇神社には国宝八点をふくむ様々な武具が奉納されております。そして、そのなかに義経、頼朝奉納の鎧兜、太刀もあります。同様に観音寺の琴弾八幡宮には参道に頼朝奉納の門が立っております。

それほど遠慮し、闘いでは戦闘に巻き込まないようにしていた船の漕ぎ手を、義経は潮目が変わるとすぐに殺傷します。そうなれば跡は漂う船ばかり。平家の者共など何ほどのことがありましようか。もう戦いにはならなかったとおもいます。鶯越といい、この壇ノ浦の闘いといい、義経は常識破りで掟破りありました。では兵力的にはどうだったのでしょうか。これは、如何に平家が追い詰められていたといえども、義経の側の倍ほどもいたようです。これに勝つためには、もう何でもやらなければならなかったのだとおもいます。義経も必死に考え、練りに練った戦略だったのだとおもいます。

ついに追い詰められた平家一門は、御座船に女御たちも同行しておりました。彼女たちは、もはやこれまでとつぎつぎ入水自殺を遂げます。そのなかに建礼門院と安德天皇もありました。ここは重要なので原文を記します。

二位殿はこの有様（ありさま）を御覧じて、日ごろ思し（おぼし）めしまうけたる事なれば、鈍色（にびいろ）の二衣（ふたつぎぬ）うちかづき、練袴（ねりばかま）のそば高く挟み、神璽(しんし)を脇に挟み、宝剣を腰に差し、主上（しゅしやう）を抱きたてまつて、「わが身は女なりとも、敵の手にはかかるまじ。君の御供に参るなり。御心ざし思ひまゐらせたまはむ人々は急ぎ続きたまへ。」とて、船場へ歩み出で（いで）られけり。主上今年は八歳にならせたまへども、御年のほどよりはるかにねびさせたまひて、御かたちうつくしく辺りも照り輝く（かがやく）ばかりなり。御髪（ぐし）黒う優々として御背中過ぎさせ給ひけり。あきれたる御有様にて、「尼ぜ、我をばいづちへ具して行かむとするぞ。」と仰せければ、

と平家物語には書いております。ではどこが重要かというと、安德天皇は主上と呼ばれています。また、三種の神器のうち八咫瓊曲玉と天叢雲剣がここにあったことです。

八咫鏡は伊勢神宮に収められておりますから、ここになくて当然です。しかしあとの二つは天皇と共にあるものです。安徳天皇はこのとき、正式な天皇であったのでした。その天皇を入水せしめ、弑したのは、直接には義経、そして、頼朝がそうさせたのでした。頼朝は大逆の罪人であります。歴史上、このようにはっきりと天皇を殺した権力者はありません。なんと罪深いことか。

後白河は千百二十七年、鳥羽天皇の第四皇子として生まれ、弟の近衛天皇が若くして亡くなったので、そのあとを継いで二十九歳で即位するという今まで類を見ない変則的な即位をして、皇位につかれたのでした。このあたり、大変複雑で、跡を追うだけで目まぐるしいのですが、平家物語を読むうえで、知っておいたほうが理解しやすくなります。

ここで白河法皇の所業を書き立て、その入り乱れた相関関係を記しても、その色欲、権勢欲の凄まじさに圧倒されるだけです。さりながら、平安貴族の時代の終わりに白河法皇の血は後白河に流れ、崇徳天皇、源氏の悲劇平家の悲劇を生み、武士階級の台頭へつながることになります。源氏、平家の悲劇とは、保元の乱は崇徳天皇の敗北となつたのですが、その敗戦処理として 後白河は反乱に加わった源為義の処刑を息子・義朝に命じ、叔父・平忠正の処刑を清盛に命じるという過酷な命令を発し、義朝、清盛の忠誠心をためしたりします。崇徳天皇のことは以前書きましたが、やはり、後白河、後鳥羽の崩御によって、まさに大魔縁となって皇族を民となし民を皇族となさんという崇徳天皇の言葉は実現いたしました。

このあたりのあまりの凄まじさに圧倒され、本題からずれてしまいました。この院政の時代、天皇が誰であれ、上皇なり、上皇が出家したのちの法皇なりで、実権をにぎっていたお方を治天の君と言いました。その治天の君と呼ぶに最もふさわしかったお方が後白河法皇でありました。義経、頼朝が安徳天皇を入水にまで追い詰めた時、彼らの後ろにはこの大天狗、後白河がおりましたので、彼らはなにも心配せず、平家と安徳天皇を攻撃できたのでした。安徳天皇が都落ちをしたとき、すでに後白河は次の天皇として後鳥羽天皇を擁立しておりました。それゆえ安徳天皇は平家にとってだけの天皇であったのでした。しかし、これとても、権力を握った者はなにをしてもいいのかと問いたくなります。

古代史において、天皇が臣下に弑された例は、実はもう一件あります。崇峻天皇様の件です。これについては歴史上、臣下により天皇が殺害されたと確定している唯一の例

です。この事件のきっかけは、何者かが猪を献上したのですが、このイノシシに向かって天皇は笄刀（こうがい）を抜き、その目を刺して、「いつかこの猪の首を斬るように、自分が憎いと思っている者を斬りたいものだ」とお言葉をついお漏らしになります。そのことを聞きつけた馬子が「天皇は自分を嫌って、亡き者にしようとしている」と警戒し、部下に暗殺命令を下します。そして東国の調を進めると偽って天皇を儀式に臨席させ、その席で東漢駒に暗殺をさせます。ところがそのあと、崇峻天皇はろくな葬儀も営まれず、翌日には早や埋葬されてしまいます。さらに不思議は続き、馬子は天皇殺害の実行犯である部下の駒を捕えて、処刑してしまいます。いわば口封じでしょうか。そして、その処刑の理由というのが、天皇殺害ではなく、駒が馬子の娘と密通したということからでした。さらに謎は深まります。駒と密通した馬子の娘とは、聖徳太子の奥さんのことでした。この事件の後、つぎの天皇に即位されたのが、推古天皇、つまり史上初めての女帝誕生でありました。

幕末、実に不可解な出来事が起こります。慶應二年、孝明天皇が突如として崩御されました。このころの政治情勢は、黒船来襲以来の尊王攘夷と公武合体が討幕へと急速にかじを切る大変革の時でした。この急速に勢いを増してきた討幕派にとっての最大の障害は、徳川慶喜でもなく、坂本龍馬でもなく、孝明天皇その人でありました。なぜなら、孝明天皇の政治信条は、攘夷と公武合体であったからです。つまり、諸外国の軍艦が来襲し、交易を半ば強迫まがいで要求してくるのに反対して外国と通商を許さず、鎖国をあくまで継続すべきとし、この困難な時期を朝廷（公）と幕府（武）が力を合わせて乗り越えてゆくべきと強く望んでいたのが、孝明天皇でありました。そんななか、時代情勢の変化によって、天皇の権威は將軍を凌駕し、その権威は幕府を上回る存在になってきておりました。そんな天皇の権威の高まりとは裏腹に、孝明天皇の攘夷、公武合体の御意志は通らなくなってまいります。つまり、尊皇攘夷派は討幕派へと変化していきます。にもかかわらず、孝明天皇は討幕には大反対で、公武合体を強く望まれました。天皇は自ら政権を担われることを望んでいなかったのです。こうして、討幕派にとっての最大の障壁は、孝明天皇となったのです。そうして、慶應二年、孝明天皇が突如として崩御となり、世の中は騒然となりました。それにより、討幕への障壁が取り除かれ、まだ幼い14歳の明治天皇が即位して、間もなく、大政奉還（たいせいほうかん）、王政復古の大号令へと進み、結局は幕府が倒れ、明治維新政府が成立します。いわば討幕派の思惑通りにことが運び、すべてが好都合に進みます。そんなことから、孝明天皇暗殺がささやかれます。なかでも、討幕派の中でいまだ身分の低い、のちに総理大臣まで登りつめた人物が、討幕派のなかで確実な地位を得るため、ことを実行した

とか噂されたりもします。某公家と明治政府初期の中樞で会った人物が黒幕ともいわれます。このことは当時すでに巷間、流布されていたことのように、アーネスト・サトウの一外交官の見た明治維新という著作物にも記録されています。この陰謀がほんとうなら、あの、日本は万世一系の天皇が統治する、皇は神聖にして侵すべからず、は何なんだと思います。結局陰謀好きの長州の体質でしょうか。